

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 地球環境学 )	氏名	高田 弥生
論文題目	京都の文化を支える北山杉林業の資源利用と景観に関する研究		
(論文内容の要旨)			
<p>北山杉林業は室町時代に起源するといわれる日本を代表する歴史的な林業地である。古くから優れた品質の北山杉丸太を供給してきた。その背景には、独自の優れた林地利用や育林技術、丸太加工技術が存在する。独特の育林形態は特徴的な林業景観を形成してきた。一方で、このような林業形態とそれに伴う林業景観は、林業の衰退に伴って変化しつつある。しかし、その詳細な研究は存在せず、林業景観の維持に関する考察は十分ではない。</p> <p>本論文は、北山杉丸太利用の変遷、北山杉林業地の管理の現状解析、及び住民意識の把握を通して、将来の北山杉林業の再生と伝統的な林業景観の維持について考察することを目的とした。</p> <p>第1章は序論であり、北山杉林業の変遷、現状、育林技術と北山杉丸太の加工技術について概観した。まず、江戸期から続く真円・無節・通直などの条件を満たす北山杉丸太を生産するための林業形態と、熟練した技術が要求される枝打ちに多くの労働量を投下する育林技術を確認した。また、磨丸太に代表される伐採後の木材加工に関しても、独特の加工方法による生産品を概観し、その特徴を示した。これらを踏まえ、近年変化しつつある北山杉林業とその景観に関する問題点を整理し、研究の目的を示した上で、本論文の構成を述べた。</p> <p>第2章では、江戸期から昭和期を経て現在に至るまでの、北山杉林業の中心地である中川地区における木材流通の特徴と変遷をまとめた。昭和中期までについては先行研究からその成果をまとめ、明治期以降の交通手段の発達による北山杉丸太の供給体制の整備、その過程での北山杉丸太の銘木としての認識の浸透、昭和中期の銘木の大量化による大量の需要の発生を示した。昭和末期以降に関しては研究が存在しないことから、中川地区内及び都市圏の間屋、木材市場等の関係者への聞き取り調査から得た結果に基づいて現状を解析した。その結果、現在では、従来の流通に加えて、各地方間屋や建材店に直接販売する経路の増加など、多様な流通経路が形成されていることを明らかにした。</p> <p>第3章では、北山杉林業地の景観を特徴づける林地の現状について解析を行った。調査は、中川地区の13戸の林家を対象に、80林地に関する詳細な土地利用の状況を森林簿と林家への聞き取り調査によって行った。その結果、林地の所有形態や細分利用の特徴は現在も維持されているものの、植林面積や若齢林が減少していることや、適切な時期に伐採が行われないうえに壮齢林の割合が増加していることが明らかになった。また、林業経営に対する考え方も林家によって異なっており、林業経営を放棄する林家と従来通りの林業経営の継続を重視する林家が存在し、林家の二極化が進んでいることも明らかになった。以上から、現在の北山杉林業地では、林地や景観に質的な変化が進行しつつあることを示した。</p> <p>第4章では、北山杉林業の現状に対する地域住民の意識を把握するために行ったアンケート調査の結果の解析を行った。その結果、北山における主要産業である林業の衰退は後継者不足による影響を強く受けていること、すなわち、主な収入源を京都市内に求める住民が増加していること、それによって植林地の管理強度が減少していることが明らかになった。一方で、森林の新たな活用方法として、森林の多面的機能に注目する意見が多く認められた。また、林業経営に積極的な考え方をもち林家があることも明らかになり、北山杉林業の低迷を打破する上では、意欲的な林家によって北山杉林業とそれによる林業景観の一部は維持できる可能性があることを示した。</p>			

( 続紙 2 )

第5章では、第2章から第4章で得られた結果をまとめた上で、将来の北山杉林業の在り方や特有の林業景観維持のための施策に関する検討を行った。その結果、北山杉林業が歴史的に発展させてきた育林技術と丸太加工技術は現在も維持され、それらの技術と生産品を評価する社会が存在していること、これらを意識しながら林業を継続することが北山杉林業の維持に有効に作用する可能性があること、北山杉林業が作り出してきた林業景観は国内外で高く評価されていることからこれを前提にした育林施業の維持が可能であること、新たな生産品利用のための市場の開拓等によって中川地区の林家に林業経営の意欲を改めて形成することが必要なこと、官民双方からの北山杉林業に対する理解の深化と経済的支援が重要であること、を示した。最後に、北山杉林業が地域を代表する景観として維持されていくための林業の活性化とそれを可能にするような時代に即した林業形態の構築の必要性を述べた。

(論文審査の結果の要旨)

日本の林業の衰退が危惧されるようになってからすでに半世紀が経とうとしている。日本を代表する林業地である京都北山も同様の状況にあり、林業形態や生産品の市場にも変化が起こりつつある。また、北山は優れた林業景観によって日本でも数少ない観光客が訪れる林業地であるが、その景観も今世紀になってから変化しつつある。しかし、以上のような変化の実態に関する研究は十分には行われていない。本論文は、北山杉林業が培ってきた育林技術と丸太加工技術を踏まえたうえで、北山杉林業の現状解析を行い、将来の林業形態と景観を検討した研究に関する成果に基づくものである。本論文の評価すべき点は以下のとおりである。

1. 日本を代表する林業地帯である北山地域において、北山杉林業の近年の変化について、文献調査と現地調査を行うことによって、その現状を実際の林地利用と景観の観点から明らかにした。得られた知見は、先行研究では十分に示されてこなかったものであること、近年の最新の知見を示したことから高い学術的価値を認めることができる。

2. わが国における林業の衰退は20世紀後半から顕在化しているが、北山杉林業においてもその状況に変わりはない中で、住民へのアンケート調査を通して、現状の把握に加えて将来の展開について必要な方向性を示し、その知見に基づく提案を行った点は、社会に対する利益の視点から重要である。

3. 産業の衰退によって劣化する林業地においては新たな林業形態と資源利用を考える必要があるが、その過程では自然環境そのものの劣化等の問題の解決策にもなることを考察しており、示された視点は地球環境問題を解決する上で重要な成果である。

以上のように、本論文は、日本を代表する林業地帯でありながら林業の衰退によって変化しつつある京都市の北山杉林業地を対象に、林業と住民意識の現状を把握した上で、林業形態や林業景観の観点からその解決策を検討したものであり、森林科学、文化的景観論、地球環境学の発展、および林業景観の再生方法の構築に寄与するところが大きい、

よって、本論文は博士(地球環境学)の学位論文として価値あるものと認める。

なお、令和5年1月30日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士(地球環境学)の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。

要旨公開可能日： 年 月 日以降